



蘭陀一藥功能

洋学文庫
文庫8
J2

指掌録附編



阿蘭陀一藥功能



○こくろノ能

一頭痛第一打身内外ヨリ用テ吉

眩暈或ハ胸ノウカエ或ハ痰有テ用テ吉

一吐血腹痛打血身ニ滯有テ用テ吉

ニヤクリニハ酒ニテ用テ吉

一斤腹痛時麝香ヲ加テ用テ吉

口中ニ穴ヲ申スル時蜂ノ蜜ヲ加テ穴

内ノトシ

一食傷ニ用或ハ悪ムカアヨリ煩用テ吉

毒虫毒魚鳥ノ毒モソノトシテ

文ノ時ニフタノ油ニテトキ更合使

又用テ吉

一 大獲茶ニテ用ル

小兒ノ煩ハ食物ニ更用テ吉

下血淋病或ハ懐妊ノ時コロビテ

失テル時欠ニク其香ヲカヤテ吉

一 夕モハコカ山カ又ル時用テ吉

能温クテ置ハ出ル但モ命ヲ合カ

病人ノ大小ヨリテ可用

一 瘧疾用テ吉物惣而身ヲ強スルモノ

ナリ右何シモ年久コ中人ハ一日ニ度

ワ三四分程酒ニテ或ハ湯水ニテ

可用之

○ ワニカノルノ能

漢語ニ一ノ角ヲウニカノル能
是ノ獸ノ角ニ其獸
名ニス犀角ノ萎テハニ
蜜田
来ル

一 食傷用テ吉

タルニ用テ吉

一 大獲氣有ニ用テ吉

一 喉痺ニ内ニ用外ニモ引テ吉

一 毒虫ニクワシタルニ付テ吉

一 惡血古血或ハ血虫胸虫ニ用テ吉

一 クワクワニ或ハカクノ煩ニ用テ吉

一 氣ウカシタル者ハ花ノ水ニテスリテ

用テ吉

一 万毒魚ニ立クタルニ用テ吉物惣而解

一 瘡ニ打其外惡腫物出ルニ執氣

有時水ニテモ酢ニテモスリ立テ付ル

惡瘡ノ執ハ腫ノ上ニ引テ吉

一 傷寒ニ一日ニ二度程用テ吉

一 瘰癧熱氣ヲメカ子ニ時用テ吉
一 産後ニ用テ吉但竹根草ヲウケ茶
を胎裡粉ニテ加用ニ懐人ニ忌之

○ べうドロバシ能

一 惣而諸毒ケ之

一 瘰癧疔ニ用テ吉但其時ハ身ヲ温メテ
アヤシカキテ吉

一 腹ニエテ痛時用テ吉或ハ斤腹痛
時ニ用テ吉

一 身内ニ風有時用テ吉惣而身内ニ煩
出ルト覺時用テ吉

一 ワウタニ用テ吉氣ノワキ胸ノワカ吉
一度ニ毒合裡用テ吉又ハ氣強人ハ

或合裡用テ吉酒ニテ湯ニテ用之
何レノ業ニ指合不申之

○ じりんノ能 紅夷國ヨリ來真胆也不詳其莫之
形状服後半日不可食生菜

一 万毒ケ之之食傷ニ用テ吉刺病吉

一 虫腹ノ痛吉胸虫ニヤク吉寒風
用テ吉毒虫毒魚ノ喰ヌルニ付テ吉

一 クワクラニ血虫ニ酒ニテ用テ吉

一 赤腹下リ腫ニ酒ニテ用之但昼ノ
内切下ハ瘰癧之症故水ニテ用テ吉

一 夜切下ハ寒之症故酒ニテ用之
第一産後ノ妙業ニ古血下リカ子

痛時右ノ如クニ酒ニテ用之患血ヲ
下之痛ヲ止之を何レノ藥業ニテ

指合不申去去勢気有人ハ不用之
 一下血止り不申時一七日程毎日用之
 但酒青キ物ノ類不食ナリ
 一ヲコリワルキ氣ニ言ハテ瘡ニ敷之
 一虫喰甚ハ他ニ入テ言カクノ類ニ言
 頭痛ニ言テカキニ不断女リ用テ言
 一午足ノ内虫喰白ク皮ケトシテ思キ
 一又リテ言ヒムコトヤク口虫ニ強テ言
 一尿ニ物ヤド出ヌル時ハ水ニテトキ付之
 一鼻其外何レ吹ニテモカユクニテカユク
 止リ不申時ニ酢ニテトキ付シカユク
 止之又用ニハ一度ニカ三分程用之
 一小兒ニハ甚カ令程用見合一用之

○ルガウシノ能

一食傷万毒ナシニ言別而虫ニ用言
 一胸ウツカニ言胸痛ニモ言日ニ氣ノ
 一アラウキニ言酒ニ強ツエウヌル時用言
 ○コロクスワリエニタリノ能
 一元氣衰ヌル人ニ若キ雞ヲ毛羽水
 一煎入五合ニ成ト煮ウヌ右ノ五合ノ
 一煮汁ニコロクスウヌ入テ五合ノ汁
 一四合ニ成程ニ煎ニテ言一度ニ天月ニ
 一半分用之右ノ汁ニ日ニ成トモ又ハ
 一三日成トモ用之
 一右ノ煮汁ニ草ク婦人有之ニカウバ
 一チフラニモウニ水天月ニ益入モ益ニ

剪し其中へ玉子ノ赤身一ツ入能カキ
更ニ三度ニ用ルニ元氣ノ位ニヨリテ
二廻リモ用ルニ諸腫物ノ膿多ク出テ
草外ニ病入ニ右ノ如ク用ルニ元氣力
増腫物ノ肉早ク上ルニ又産後ニテ
不カ付フラ〜ト煩ヤセ衰々ルニ
右同前ニテ用ルニ氣力増肥滿ラ
スニ但ニ雞ノ汁ニテハ不用知ノ赤
身ニテ用ル吉

一カクノ性ノ人ニハカフヲニテ用ルニ
黄葉ノ如クニ香ニ剪シテ用ルニ雞ノ
者汁モ知ノ赤身モ入メ
一小便不通ニハカフヲニテ用ルニ細赤ノ蜜

ニテ能加減ニ煉テ湯ニテ用ルモ用ル
前ニ午洗ニ水ヲ入メテ用ルニ
虛性人ニハ剪テ成トモ細赤ノ具
成トモ用ルニ不斷用ル吉

河蘭正傳

油の取極秘の書

△ ああよそくすの

こころの油の夏

一 小便不通之病人、輕重に隨て

二 三を物程をも見合ふたし酒

オウラ用ん之ふたし酒を時ハ常

酒も焼酒も用之石淋ノ病

一 右同前用之廿月水通かぬ

さし同前用之

一 び油のち程ハこころ成程細

ホしてびいどろこころ入破

うつみ下ニ炭火ヲ入焼酒煎ル
こゝにいけら丸ト之を程口傳カ

△あつ下のめとむすく

小くつこの仲夏

一腹中下りリいその花を蜜漬
じ他五病程も用之心能止所
いその花ノ漬物之時ハかやとい
尸草より是こもやとも用ん

一喘息斗々于一盃程ここ病
程子若ノ上ニ置食自然用吉
すもあつこ山ニ撥有るも用ん
但酒ヲ温メテも用一度ニ五病

程用てり

一け他のち程いあつこ細糸
水ニ浸して四五日程置ここ
焼酒丸ヲ程の要んここ
口ニ木こも一ニ室程い移入
くつたりリ之口傳カ仲夏
の水も腹中下ニ安ク用之
他の
あつこの

△あつこのあ小わ

小うわの仲夏

一腹こもあつ痛結こリ時
二ニ病程酒も用積も

右同前用之

一 此池の左程は少くつこの池と同前
なる但こゝさうあつと池と云ふ
じいころ又置たる池の下に沈水の上
うより之を引くといふや去りたる
池成之びのち一度おちて一盃
程用てり又曰少くつこの池
上よりさび池の下に沈し

△あつよほあ

金の池の夏

一 性微温之天地の悪風おつて
頓死す一或は日腫の程身め

の悪瘡有夏あつげ池ラニこあ
程舌の上置テ右愈ト之後こ
難ノ毒ヲさか程細糸して酒
をもたつ池も用之又之類瘡も
右同前用之

昔やんこの山の帝王をげは
山の帝王をげ人前之瘡瘡人す
禁ラるしとれを人々帝王を
げ池ラけして瘡瘡人ノ氣を口
陰けをれを其候年念スト之

△あつよほあ

いのんこの池の夏

一 他ハあちんと云々の川の水に
浮流せしむ

△ ああふふめんとて

そららの他ノ夏

一 性微温之又月つ入ふ令長成こ
ぶたし酒をまきさし一程のまを合せて
用ん之

一 他のおねい落葉荷のまを葉ヲ
タリカ新ニテして女しゆぐ
たる時、あれたから仲ラしゆぐサ
リ加テ付テしゆぐをん之

△ ああふふあちんと云々の

らんじの他ノ夏

一 性微温之胃中ニ風有時は他
ニ云々の裡にあふのどは他を命
加て用之あふのどは他を命
一味し用之あふのどは他を命
用てし

一 他のおねいらんじの生成ヲ
思ふものしゆしして腐ラし
後こししきよめりかかん
らんじニなるハ水漬置かんと
水に漬をまきこしし程置し

一 ありふくすしき

いよりのゆり

一 性天換之能いばう愈ス之いば切
其切口ニ木綿ヲ巻テラ目と云
池ヲ女陰付りぬいばの根枝ヲ
愈之いばつらき池はいばの切口
付て腸ニ付ヌ根ニ可付之いばの根
枝たる根ハ入りまこ池ヲ付て吉
能愈之天明ノ痛ハいばハ裏程
とち客 四十月 水 巻
括搦皮 三十日 味ヲ見
糟ヲ云り右ノ八尋の池ヲ入からま

口ニ含明ノ痛知と入明てころくと
ありて吐すいば女も吞へる
一 いばの根ハゆつこの池と同前之
池右たる海の水より池ニ時
水ヲ用て

△ ありふくすしき

たんそんの池ノ草

一 性天換之虫喰止薬ニ穴明て痛時
本綿のホウリヲ中ニ浸し穴中ハ
置て其穴ノ痛止之腸ニ付ヌ根ニ可付
あり口中へるき海りありて吐す
いば腸ニ付て痛し又頭ノ痛

一性寒之がううふい気大熱気と
かきさくけ他置病程の湯
用之又做がす之腐りかき
して廣くくすまよす
あけ他と唐ノ虫と酢と女と
こして陰を

一け他のおねはかまう温多事
いさう加粉して焼酒おね
ねとここの他と同前

△あつよちがもつみ

肉桂の他も又

一性大熱之心気不足の人け他二三

病程用之能きまう治め心気
養良但陰しく又笑あつよち
時心血散心気不足する用
懐妊女四五月のる本陰ても怪
すきたる時胎その受者け他
四五病程あつよちも月おね
用母の気うつ〜胎おね
一け他のおねはかまう温多事
あつよちの下に

△あつよちがもつみ

おたの内の座に有る石
物有まうたる

一性冷之男女の款おしき小

山はたなる。強付能念心し

一 じゆのちねの石ころ成物ヲ出鎔入
みしうししてしよのちねのちねのちね
木綿ヲぬりして置きしヲ押付け
ちねのちねのちねのちねのちね
しめて袋長に女も風をあてぬね
ししてちねのちねのちねのちね
下、銚子すけのちねのちねのちね
のちねのちねのちねのちねのちね
風のちねのちねのちねのちねのちね
のちね

△あつよやねいぢぢ

そまねねの實のちね

一 性温之石淋も小便詰りたるは
けゆ四五石程酒を飲場も
用の上立座な胞衣下ろさるは又ハ
あつ腰やさ痛も四五石程酒
て用ハ

一 じゆのちねの陳皮ノ汁と同前
ふん

△あつよやおえあつぢ

ちねのちね

一 性温之寸白も指入して

たる時ト一痛知もい他ヲ除て
がー指入たる物腹中ニおさしめ
頭ニおさしめし其縁をけ
てもさくさくけ他ヲ付し能く
ゆゑ又身の内ニおさしめし
者ニ除けし能散之気腫ニ療癒
のあつめけしけし其上ニこ
うストむすゞおさすめりし
付し一之又も能散之

一け他のおねいむし能者ヲ赤身
けし細くさくさく錦も暗木綿
包ころころラこもさくさく

一めえいさく錦くけしなへ
もよりのわやーしなえさし又
温くさくさくし他みさし

△あつよぐんあつ

まゝの他古又

一性獲之身内でのかきしたる時
四五番の程みたりゆきも日本酒
用之入るさくさくおさしめ
ゆかぬる時け他ヲ木綿のさし
けし鼻の内、おさす其香かき
くさくさし何しきもさしたる病
ト一すまのさくさくおさしめ

一 じゆのちねハ陳皮ノ他ト同前
ちん

△ あつよふしつせい

脂の他ノ草

一 性燥之印能てぬめらひれと同
前之但疥の上ハ陰付て
疥のゆふしバ悪し

一 じゆのちねハよむせらふれのせい
同前ト

△ あつよふしつせい

らんの他ノ草

一 性冷之れノ枝なる時ろくき

五分程粉にして又らして八分程
い他さトユウ程ハ煉合れ枝
なる福分を其エラ木綿を包
置へハれ枝なる孫能かき
し

一 じゆのちねハらろ者とりして
成程細成布をこきまがして
あつよふしつせいハ沈て他ハ
上ニ浮之具浮なるうね

△ あつよふしつせい

野さの花の他草

一 性燥之筋肉ノ痛ラ去りし

分は他ノ油と合テ陰付ん

一 じゆの丸根の油の花ラゴラナラ

おんトかん油の油と合テ口能

そり久し〜日ニテ〜多ク〜

種ラ〜

△あつふの油

白油の花の油

一 性温之筋骨の痛陰付〜

カそのルノ油ヲ加テ付ん〜

人の時ノ腹ノ白お悪ク時時〜

〜痛

〜能地之生〜

腫〜陰付〜

一 じゆの丸根野菊の油も同前

〜

△あつふの油

おんトかん油の花の油

一 性温之腫物金瘡の内上〜

温メ〜付〜能〜

但〜

一 じゆの丸根の油と合テ〜

お用の油と合テ〜

〜能〜

〜

布フにてここししてよよし

△ああららふふららううささ

ううこの花のゆゆまま

一性冷之打身一性冷之打身陰付陰付りり甘甘とと

正正ここににララスストトてて魚魚人人すすのの之之ヲヲ本本綿綿伸伸

付付りり一一折折破破たたるるぬぬれれいい胃胃中中々々

ぬぬれれいい付付りり胃胃中中々々ハハ口口傳傳方方

一一はは他他ののちちねねハハ野野菊菊ののゆゆとと同同前前々々

ちちねねとと

△ああららふふららううささ

魚魚つつのの實實のの他他々々

一性温燥之打一性温燥之打疾肉損疾肉損たたるるここららううのの

他他ララここアア一一加加ララ付付之之能能愈愈肉肉上上愈愈

之之一一切切もも歎歎毒毒虫虫毒毒莫莫ららぬぬ

ささららぬぬてて痛痛はは他他々々付付りりいいりり

食食胸胸づづつつ入入流流ししるる吐吐逆逆すす

もも胸胸のの水水がが陰陰々々がが一一々々温温

ててはは一一筋筋のの痛痛又又ハハ業業のの痛痛々々吉吉

一一はは他他ののちちねねハハららららつつのの實實成成程程能能

ちちねねハハららららつつのの實實成成程程能能

人人又又業業成成程程日日々々のの業業力力々々付付

ててらら付付りりいいりり一一實實々々々々々々々々

一一ハハ木木のの葉葉ハハ阿阿蘭蘭陀陀のの玉玉とと

軍陣軍陣勝勝利利ヲヲ得得陣陣陣陣すす時時

くー 掌の肉は毒を胎と先胎と
女は入らぬ能くすををス之ヤ
温クテ便ク

右ア九方之油ノ取様ハ阿蘭陀

正傳也

メストル

アルニス傳之也

